

2. 【第二部】 パネルディスカッション

【総合司会】

笹倉淳史（関西大学・学生センター所長、商学部教授）

【コーディネーター・司会】

大島薫（関西大学・学生センター副所長、文学部教授）

【法政大学・パネリスト】

木原 章（市ヶ谷学生センター長、経営学部教授）

土屋貴之（学生センター・市ヶ谷学生生活課）

平塚久幸（課外教養プログラムプロジェクトリーダー、経営学部・経営戦略学科4年）

【関西大学・パネリスト】

田中俊也（正課教育コーディネーター、文学部教授）

早川亮馬（学生センター・学生生活課）

松田優一（ピア・コミュニティ運営本部長、文学部・総合人文学科4年）



司会・大島 第二部では「学生スタッフ、ピア・サポーターの魅力」ということで、ディスカッションを行いたいと思います。第一部で両大学における「ピア・サポート活動」について具体的な活動報告がなされたわけですが、登壇している方々、それからフロアの皆さん方は、両校の活動内容について、どういった共通性、どういった相違性を感じましたでしょうか。キーワードは「ピア・サポート」、また共同体として活動する「コミュニティ」であったと思います。それから両校は、関西大学の実施責任者である芝井副学長からもお話がありましたように、歴史的にも非常によく似た経緯をもって設立されており、現在の学生数においても非常にたくさんの学生を抱えている大学の活動として、マンモス大学が持つ学生支援の悩みというものは似たようなところがあると思います。そういった中で、まず共通性と相違性を明らかにしておきたいと思うわけです。同じ言葉を使っている、多少異なったニュアンスで「コミュニティ」や「ピア・サポート」の意味を捉えているところがあったと思います。ピア・サポートに関しては、教育心理学でも現在では研究課題とされておりますし、共通的な理解がなされていると思いますが、その理念については法政大学が配ってくださった「学生スタッフ募集」パンフレットの中で、表にしてわかりやすく記して下さっています。このような点は共通するところと私どもはお聞きしていたわけですが、いかがでございましょうか。まず、木原さんからご発言願えますでしょうか。

法政・木原 関西大学の「ピア・コミュニティ」というのは、先ほども話されていましたが、できるだけ学生に自主的にやってもらうという発想が強くて、大学としてはできるだけ口を出さない方針であるという気がしました。それに対して法政大学は「学内インターンシップ」という言葉がありましたように、教職員が積極的に学生に関わり、指導し、共に働く「協働」という発想が強いと思います。どちらが良い／悪いということではなく、法政大学の場合は、どういう形で大学スタッフと学生とが関係しあうかという点が、ある意味では非常に難しい裁量となっています。担当職員にはすごく入れ込むタイプと逆に放任主義のタイプがありますが、基本的にはできるだけ共に関わり合いながら働こうという点で、最大の違いが見えてきたかなという感じがします。

司会・大島 ありがとうございます。では、関西大学の方はいかがでしょうか。田中さんにマイクを向ける前に、実際に学生の活動の直接支援を行っている早川さんからお願いできますか。

第3章 学生支援GPシンポジウム実施報告

関西・早川 初めまして、関西大学・学生センターの早川と申します。私が考えます相違点は「ピア・サポート」というツール、手法は同じだと思うのですが、先ほど木原先生がおっしゃいました、本学の学生には「主体性」「自主性」がある点だと思います。この点につきましては、本学でピア・サポートを行う学生を「ピア・サポータ」と呼称していますが、先ほど本学の五藤から説明がありましたように、正課教育でまずトレーニングをしております。正課教育は春学期だけですので、それ以外にも途中から参加したい学生のニーズは多数あります。その学生に関しましても、単に参加していただくだけではなく、事前にトレーニングを受けてもらいます。それで、ピア・サポートとは何かという理念から、「コミュニケーション能力」や「傾聴スキル」など、さまざまなことをトレーニングした上で自主的に考えてもらいます。ただ、ピア・サポータ自身も支援が必要な学生ですので、彼らに対する支援に、しっかりと教職員が目をかける、しっかりとサポート体制を組んでいるのが本学の体制です。そこで法政大学は、私どもから何度かコミュニケーションさせていただく中で、本当に学生と教職員の距離が近いと感じます。学生のミーティングにも教職員が入れているという話をうかがっておりますが、私どもは入らない時の方が多いですね。意見を聞いた上で僕らがフィードバックしたり、また一緒に入る時もありますし、「つくり上げ方」という点で少し違うのかなと思います。

司会・大島 両校の相違に関して、今、木原さんと早川さんにご発言いただきました。どうやら法政大学は「教職員と学生との協働」を目指されており、教職員というのは学生サポーターを育成することにおいて「学生支援のプロ」として教育するという形をとっておられるようですね。それに対して、関西大学は全学的に正課教育でピア・サポータとしての「意識教育」「スキル教育」を行った上で、その後は学生たちの中から溢れ出るものを考えさせ、行動させることを教職員が見守っていくという方法により、教職員と学生との間をとっているということになるかと思えます。どちらが良いかということではなく、両校におけるピア・サポートへの大学教職員の関わり方の相違として、ご提示したいと思えます。今、早川さんには発言をしてもらったのですが、ピアを支援する、特に職員の視点というのを聞いておきたいと思えます。フロアにも学生支援を担当していらっしゃる職員の方がたくさんお見えになっておりますので、まずその点を聞いてもらいたいと思えます。土屋さん、ピアを支援する職員の視点として、また法政大学の職員として、どのように関わっておられますか。

法政・土屋 法政大学・学生センターの土屋と申します。今の話の流れの中で、法政大学と関西大学の違いが見えてきました。まず、関西大学は正課授業でかつちりピア・サポータを育ててからフィールドに送り出しているように思います。一方、私は日頃、学生に「まずやってみよう」と言っています。特別なスキルも持たず、学生はプロジェクト形式でまずやってみる。そうすると、必ず問題点が出てきます。ミーティングを進める上でメンバーをうまくまとめられない、ファシリテーション・スキルが足りないとか、自己主張がうまくできない、アサーション・スキルが足りないとか、そこで学生から、自分にはこういうスキルがないから、法政の学生にもきっと必要なんじゃないか、といった提案があります。それらは、大学が用意できなかったようなスキルアップ、エンパワーメント系の講座となります。例えば、最近流行りのところでは「マインドマップ講座」や「ロジカル・ライティング講座」があります。これらは、教職員が事前に考えて学生に提供できるような講座ではないと思うので、学生とのOJTから生まれてきたエンパワーメント系の講座だと思っています。そういった意味で、まず学生が何かやってみる。そこでぶち当たった問題を、どうやって大学と学生が協力して解決していくかという点が、プロジェクト活動の醍醐味だと思っています。

参考までに、私が担当しております「法政大学学生生活実態調査」の調査結果を紹介します。これは約3万人の学部学生から1万人を無作為に抽出した調査です。その中で「悩み・不安がありますか？」という質問に対して、約7割の68.5%もの学生が「悩み・不安がある」と回答しています。これは当然の結果だと思います。しかも、悩みや不安の内容が実に多様化しています。学業、進級、就職、さらには異性や友人関係、自分の性格、実

第3章 学生支援GPシンポジウム実施報告

に多様です。そこで次の「その悩みを誰に相談しましたか？」という質問に対して、先輩・友人が圧倒的に多い約6割の55.7%。次に両親の32.5%、兄弟・姉妹の12.9%と続きます。一方、教職員に相談した人は2.5%です。そして「学生相談室」。法政大学も心理カウンセラーなどの専門スタッフを配置してサポートにあたっておりますが、その学生相談室に相談した学生が1.6%で、これを見ると、学生は同級生などの「身近な存在」「身近なコミュニティ」に相談することで、自助的に悩みを解決しているのではないかと思いました。また、木原センター長のプレゼンにもありましたが、「サークルに入っていますか？」という質問に対して、約5割の51.4%の学生が入っていません。ただ、サークル加入者のうち大学が活動実態を把握している公認団体に限ると25%程度となります。どのコミュニティにも属していない、ゼミにもサークルにも入っていない、その学生たちが不安・悩みをどこで解決するかと言えば、大学として、そういう場をつくらなければならない。それが、この第3のコミュニティ、Hosei PSC（ピア・サポートコミュニティ）の構想につながったわけです。そういった観点から7つのプロジェクトを学生と一緒に、ただの「居場所づくり」というだけでなく、「悩みの解決の場」として展開しています。

司会・大島 ありがとうございます。私立大学、特に学生数の多い私立大学の悩みというのが、今の土屋さんの発言から明らかになったと思います。おそらく関西大学でも同じような状況で、この「ピア・コミュニティ」を創設するきっかけになったと思われまます。法政大学の「第3のコミュニティ」、ゼミなどの正課教育におけるコミュニティでもない、クラブなどの課外活動におけるコミュニティでもない、第3のコミュニティというのが、今回の「ピア・サポートコミュニティ」であるという位置付けになっていると思いますが、早川さん、関西大学の「ピア・コミュニティ」との違いは、どのように見えていますか。

関西・早川 今の質問は簡単なようでもすごく難しいのですが、私どもも実態調査をやっており、同様のデータを収集しております。土屋さんがおっしゃったようなピア・サポート、お互いコミュニティであり、仲間への相談が多いことも共通しています。相違点ですが、課外活動ですと私どもも学生生活課は文化会、学術研究会、同好会の窓口をやっております。課外活動は自主活動ですが、自分本位というか、まず「自己満足」を重視した活動がすごく多いと思うんですね。そのため「あれをやりたい」「これをやりたい」といった要望ばかり。その中で、大学を良くしようとか、お互い支え合おうという概念は全くありません。例えば、音楽系サークルからライブをしたいのでどこか場所を貸してほしいとの依頼があり、壊したら壊したままというエピソードがあったりします。

ピアの違いですが、先ほど土屋さんがいいなあと思ったのは、とりあえずやってみようという概念なんですね。私もトレーニングをしますが、いろんな批判があります。これはやった方がいい、やめた方がいい。とりあえずやってみようという概念のもと、いろんな提案があるのですがプラスの発想で指導します。今日は「指導」という表現を使います。だから、課外活動ですと「これはあかんやろう」とルールのもとで話をしますが、「こうやったら、この提案やったら、こうしたら企画が実現するのちゃう？」っていう話もしますし、ちょっと対応が違うかもしれませんね。そういう対応を心掛けています。

そういう点で、課外活動がピアとは違うと思いますし、ピア・サポート、本学はそれぞれ連携部署の責任の下、学生と一緒に動いているという点がすごく違うと思います。今、隣にいる松田は運営本部ですが「新入生座談会」などを行いました。新入生座談会は、新入生の悩みなどを聞く場を提供するものですが、そこで何かあればすぐ私が駆けつけて一緒に話をすることもありますし、大学としてそのイベントを構築しているという点では、課外活動とは少し違うのかなと認識しております。

司会・大島 現場で支える職員の視点で、法政大学・関西大学の「ピア」について話していただきました。どういった実施方法でも、結局求めているものが両校とも同じであることについては、第一部でみなさんに大体理解

第3章 学生支援GPシンポジウム実施報告

してもらっていると思いますが、こういった方法で行えば、よりそれぞれの大学に似合った、大学らしいピアを形成できるかというのは、これから両校ともに本当に難しい問題であろうかと思われま

では、「ピアって、目的達成のためにそんなに魅力的な活動なの？」という点を、問うてみたいと思います。そこで、基調報告をお願いしたいと思います。関西大学では、先ほども申し上げましたように、正課教育を実施しております。その正課教育を受講した学生と受講していない学生、それからピア・サポートを実際に行っている学生と行っていない学生、いろんなパターンにおいて、社会意識がどのように育っているのかということ

関西・田中 関西大学の田中でございます。先ほど早川から「クラブ活動は比較的自分のためにやり、そこから自然に他の人のためになることをやるというのはあまり期待できない」という話がありました。まさにその通りで、このピア・サポートを考える時に、関西大学の場合

はもう1つキャッチコピーとして「関大生総サポーター」という理念、つまり一部の人達がサポーターでそれ以外の人に向ける、そういう関係ではなくて、みんながサポーター的な発想になれるような、そういう学生を育てるということで、やっているわけです。その中の1つに、先ほどご紹介しました「正課教育」がございまして、前期の全てのコマを使って、我々教職員が一体となってレクチャーいたします。中には、合宿をして演習をするということもあります。その目的は何かということですが、学生がそのままの形で利己というよりも利他、他の人の利益になるような行動が自然に生まれてくるかどうかということ

を考えた時に、その他の人のためになるような行動の背景にあるものは何か？1つは「共感性」で、これがどのくらいあるか、あるいはそこにどのくらい関与できるかを考えました。もう1つは「援助規範意識」と申し上げますけれども、他の人の手助けをすることはすごく大事なんだ、もうちょっとと言いますと「すべきだ」という感じですね。一種、道徳につながっているようなこと

でございます。共感性や援助規範意識を背景にした向社会的行動、「向社会的行動」は私は心理学の人間ですので当たり前の概念ではありますが、まだあまり一般的ではありません。prosocial と言いますけれども、他者に対して若干のコストを伴いながら、そして誰かに言われたわけではないが敢えて行うような、そういう行動です。その向社会的な行動をターゲットにして、13回の講義、あるいは演習で、少しでも増えていくようなことが可能か、これを効果査定ということで私も授業を何コマか担当し、効果査定も院生のTA・RAと一緒に研究しております。お手元に資料が配布されていると思

います。「大学におけるピア・サポート活動の効果査定調査」ということで、2008年度と2009年度の2年間やっております。その中で特に、他者のために自分の若干のリスクをとってまでもしたくなる、実際するという向社会的行動が、講義を通してどのように変化したかを見たものが、この結果でございます。まず、山田・押江・田中と書いてある最初の資料です。今回、関西心理学会で発表するものでござい

ますけれども、その中の図3の向社会的行動をご覧いただきたいと思うのですが、赤グラフ(P)がピア・サポートの授業を受講した学生です。C(Control)は受けていない学生です。もともとピア・サポートの授業を受けた学生の方が高くなって

おりますが、この13回、または14回の授業を受けることで、若干こうやって上昇している。これは注目できる

ところだと思います。

他に見ていただきますと、例えば、共感性や援助規範意識はあまり変化がない。特に、援助規範意識は逆に少し下がっている。これは疑問符がつくところですが、少なくとも向社会的行動については、こういう形で増えていくということが見えてまいりました。その向社会的行動は、13回の授業で本当に効果があったのかということが疑問になるわけです。そこで、2009年度の授業後の結果も同様に調べています。2009年度は図表を挙げていませんが、向社会的行動については授業を受けた学生の方がはるかに高い。それから4月期より7月の方がぐっと伸びている、ということがございました。ところが、向社会的行動の2009年度の調査では、実はピア・サポートの授業を受けていないグループの方が、4月と7月の伸びを見ますと、7月

はるかに伸びています。この理由を考えてみましたが、4月の段階でクラブ・サークルに所属していないという群と、7月に

第3章 学生支援GPシンポジウム実施報告

入ってクラブ・サークルに所属した群、その要因がすごく働いたのではないかと思います。表1の結果でございます。つまり、ピア・サポートの授業を受けなかったグループの方が4月に対して7月の伸びが大きかった。その理由は、75%の学生が4月には無所属だったが7月にはクラブやサークルに入っていた。そういう意味では、クラブやサークルへの所属が、学生を向社会的な行動に向けるように育てている。クラブ・サークルへの所属が、利己的な自分のためだけのことを願って入っているのではない。そういう「クラブやサークルへの所属」というのにも、教育的な意味があるということがこの調査から見えてまいりました。

2枚目以降は2008年度の研究結果に特化しておりますけれども、大部分の説明をはしょっておりますので、「共感性とは何か」「向社会的とは何か」など詳しいところを見たい場合、細かい質問項目を少し挙げておりますので、ご覧いただければと思います。この件に関しましては、昨年、ピア・サポートの関係で先進的な取り組みをやっておりますアメリカのサウスカロライナ大学へ出かけまして、担当者と大変親しくお話しさせていただいて、そういう変化が見えてくるという、言ってみれば日本独特の1つの文化ですね。つまり、どちらかというに関西大学も法政大学も非クリスチャンと申しますか、非宗教系の大学でございますので、ある種の宗教的な縛りで向社会的な行動がいいんだぞ、という育て方はしていないわけです。そういう学生にとって、中学や高校では比較的「いいこと」をするのが恥ずかしい、ためらいがある。そういうためらいが大学で、ピア・サポートのような授業を受けることで、外されていくと言いますか、これはやった方がいいんだという感じで解放される、そういった部分も1つ大きな要因になっているのではないかと考えております。非常に大雑把な説明でございますけれども「向社会的行動が増えた」ことについてのご説明をさせていただきました。

司会・大島 ありがとうございます。大学に入学してから向社会的行動を感じる指数が、それだけでは下がってしまうという恐ろしい報告ではないかと思います。ピア等で活動している学生においては、こういった行動指数が上がっている、効果査定の結果が出たということで、効果があることが証明された報告ではないかと思いますが、田中さんのゼミで学んでいる大学院生の山田さんがこのプログラムの関西大学におけるTAを務めてくれていますので、山田さんから実際の学生たちの活動を踏まえて、この調査結果について考えるところがあれば一言お願いできますか。

フロア（関西）・山田 関西大学のピア・サポータのティーチングアシスタントとして、授業のサポートをしております山田と申します。大島先生におっしゃっていただきました効果について、1点だけ補足させていただければと思います。2008年度の調査では、ピア・サポートに取り組むことの成果の1つに「他人を援助したい」「自然に助け合いたい」という風土ができるかということをしごく大事にしているということから、援助の意識が上がっているかどうかに取り組みました。授業に参加した学生の意見や実態を、ティーチングアシスタントとして支援する立場から見ていると、例えばコミュニケーションや関わりを体験するというような取り組みがありますが、そこでコミュニケーションの大切さを実感する中で、他人の苦しみを相手の立場に立って考えてみようというコメントが多数ありました。そのことが向社会的行動という部分をすごく伸ばしたという成果を生んだのではないかと、そばで見ていると体験・実感しました。

司会・大島 関西大学での実態の報告であったわけですが、実際にピア・サポートを行っている学生たちの視点から、ピアについて考えることを話してもらおうと思います。まず法政大学の平塚さん、どうですか。

法政・平塚 「ピア・サポート」というと学生が学生に尽くしているんじゃないか、と言われることがあります。しかし、実は最終的には自分自身に何かしら返ってくるんだなと感じています。私たちスタッフは、参加学生に対してサポートを行うわけですが、その学生から学内で会った時に「あの時は平塚さんにお世話になりました。

第3章 学生支援GPシンポジウム実施報告

ありがとうございました。」と言われると、自分自身やって良かったなって思いますし、学生をサポートする中で、自分自身の「コミュニケーション力」や「社会人基礎力」が身につけてきたのではないかと思います。学生から「ありがとう」という言葉をもらうことは嬉しいですし、これから活動を頑張っていこうという糧にもなります。そういった面で双方をサポートする、自分たちと参加学生の双方にメリットがあるものだと私は考えます。

司会・大島 関西大学の松田さんはどうですか。

関西・松田 僕の中でピアとは「つながり」だと思っています。ピア活動を通して、今まで知り合えなかった学生同士、教職員の皆様、他大学のサポーター、それから、今までの本部の活動で言いますと、体育会の方々、学術研究会の方々、そのようなさまざまな方々とのつながりをつくっていく中で、多様な考え方を身につけていくことができたかなと考えています。そして、自分たちにとって何が足りないのかというところを真摯に見つめて、そこを伸ばしていこうというような雰囲気をつくれていることが、ピアの最大の効果であると考えております。

司会・大島 はい、ありがとうございます。今登壇している学生2人から話がありましたが、ピアの実感というのは非常にプラスのものばかりなんですね。実際、効果査定でも、田中さんの報告は「向社会的行動においてプラスになっている」というので、この実施が今の若者に足りないところと近年言われているところに非常に益を有するものである、それだけの結論に終わってしまいそうなおそれがあります。確かに「魅力がある」「効果がある」ということは、ここまでの両校の活動において証明できそうです。

それでは、これを行う上での苦労話というものに話を移していきたいと思っています。実際に行っている学生たち、それから、学生をサポートしている教職員から山のようにあるかと思っています。そこから何が学ばれているのか。関西大学の事例報告の中で、「とても苦労した」と感じさせるようなプレゼンテーションをなさった KUブリッジの報告にもあったと思います。彼らの報告では、支援している留学生に対する苦労よりも、自分たちが活動していく苦労というものがありませんでした。森末さん、ピアを行っていく難しさ、その中で、自分がなぜピアをするのかを話してください。

フロア（関西）・森末 最初は、部署内でそんなに問題があるとは思っていませんでした。実際にやってみると、人間関係などで来られなくなる人もいたりして、前半期には活動が進まなくなったということがありました。今こうして色々企画などが進んでいますが、企画がうまくいった時に、メンバーから「リーダーシップをとってくれて、前よりもとても過ごしやすい雰囲気になって良かった」という声があり、僕としては嬉しかったですし、それを聞いて頑張ろうと思いました。それが一番僕のモチベーションを維持できている部分なのかなと思います。

司会・大島 ありがとうございます。法政大学の学生にも同じ質問をしたいのですが、木原さんから聞いてもらおうと思います。

法政・木原 例えば「同郷会プロジェクト」で、半ば喧嘩腰になってしまうような場面もあってかなり苦労しています。そういったことは人が集まる場面では、ごく一般的なことです。

西村君に聞いてみたいと思います。同郷会プロジェクトとは、もともと「県人会をつくろう」ということから始まりましたが、学生の気持ちは「同じ県から出て来た人達と、今更一緒にになりたくない」というものでした。ところが私達はだんだん年を取ってくると、地方の人と一緒にいることは大変素晴らしいなと思います。彼らの年代としては、今ひとつ目的を見出すのに苦労しているのではないかと思います。西村君いかがでしょうか。

第3章 学生支援GPシンポジウム実施報告

フロア（法政）・西村 そうですね、確かにそういった面もあります。1・2年生の頃は地方から出てきたばかりで東京に憧れてやってきた人も多く「東京にまで来て」という感情はあると思いますが、3・4年生になってから改めて地方の良さや故郷への想いを強くして、そこから参加される方も多くいると思います。

悩みとしては、プレゼンの時も「ギャップ」と申し上げたのですが、既に組織があって、同郷の先輩がいると思って入ってくる方が多く、まだ立ち上げの段階だと知ると離れていく人がたくさんいることです。ゼロからものをつくり上げていく、そういう想いで活動をやろうという意気込みを持っている学生がちょっと少ないのかな、という気がします。

司会・大島 様々な場面で学生たちが色々と考えていることが、今の2人の話でも感じ取れたと思います。もう少し現場の学生たちの声を聞いてみたいと思います。今日一部で登壇した学生以外でも構いませんし、登壇した学生でも構いません。ピア活動を通じて感じたこと、すごく辛かったこと、今ピア・サポータとして活動していることなど、色々なことを話してみてくださいませんか。

法政・平塚 苦労したことで、1ヶ月半ほど前の「ペルセウス座流星群観測」というイベントを紹介します。その時はペルセウス座流星群がよく見えるということで、自然豊かな多摩キャンパスで小学生と一緒に泊りがけで天体観測をしようというものでした。その中で、準備のための「事前ミーティング」を3回行いました。事前ミーティングは、KYOPRO スタッフだけでなく、公募した一般学生も一緒に集まりました。普段私はKYOPROのリーダーとしてプロジェクトをまとめているのですが、初対面の学生と一緒に実施することはかなり難しいと思いました。何が難しいかと言いますと、自分勝手に行動する人の対応に苦労しました。当日混乱しないように事前のミーティングで色々なことを決めたのですが、当日になって急に「ああしたい」「こうしたい」と個人的な意見を主張する学生がいました。説得に苦労しながら、なんとか無事にイベントをやり遂げることができましたが、初対面の人に対してはどんな意見であれ、真剣に相手の目を見て聞いてみる、ということの大切さをイベントを通して学びました。

関西・田中 法政大学にうかがいたいことが1つございます。ボランティア支援プロジェクトのご発表の中で、「ロジカル・ライティング講座」など、かなりスタディスキルの企画もされていたように思います。一方で、課外教養プログラムプロジェクト、KYOPROではそういうことを含めたプログラムを企画されている。学生がどちらの企画になるか分からない時に、競合するような形を解消する工夫はございますでしょうか。

法政・土屋 学生が困っていますので私から回答します。まず、法政大学のプログラムに変わりありませんので、「これはどのプロジェクトが企画したイベントなんだ」ってかっちり区切る必要はないと思います。法政大学の学生のために、学生が考えて、それを実現すれば、誰が考えて誰が実行しても良いと思います。良い取り組みはどこがやっても良いのです。

今日もボランティア支援プロジェクトから2名の学生に発表していただきましたが、その学生たちが日頃の活動の中で大学に提出してくる企画書、及び議事録、そして外部に発信する文章、これらを担当職員が見て、最近の学生は文章力が弱い、論理的に考えることが弱いと感じた。しかもそれは学生自身も感じていることで、自分たちはこういうスキルを身につけたい、その想いを大学に提案してくれました。それをボランティア支援プロジェクト（VSP）の学生が考えてくれたスキルアップ講座として、主にVSPの学生を中心に受講させつつ、かつ「課外教養プログラム」として一般学生に対しても開く。ですので、学生スタッフだけのclosedなイベントではなくて、法政大学3万人の学生にとって開かれたイベントにするということを心がけています。

第3章 学生支援GPシンポジウム実施報告

司会・大島 私も法政大学の「ボランティア支援プロジェクト」って面白いなと思って、プレゼンテーションを聞いていました。ボランティアを実際に行う学生のサポートという発想で、企画する子たち、会議する子たち、色々な役割の子たちが1つのコミュニティにいるわけです。それで、ボランティア活動をするのではなくて、それを支援するグループができているということを知ったわけですが、1点教えていただきたいのは、ボランティア支援プロジェクトの人達がボランティア活動をしたり、あるいはボランティア活動をしている人達がボランティア支援プロジェクトのスタッフとして活動することはありますか？

フロア（法政）・飯塚 結論から言うと、我々スタッフがボランティアをすることはあります。「基幹プロジェクト」に関してはスタッフも企画スタッフとして参加しますが、参加者と同じ立場で作業を行います。最近では地域との結びつきも強めたいということで、我々を中心に周りの学生も巻き込んで一緒に企画していこうというプログラムも考えております。

司会・大島 ありがとうございます。「支援される側と支援する側」「教職員と学生」であれば、ある程度その構図は見えやすいのですが、「学生と学生」「先輩と後輩」「1年生と4年生」といった関係性の持ち方において、どのようにこの「ピア・コミュニティ」あるいは「ピア・サポートコミュニティ」というものが学生社会、キャンパスにおける学生文化の中に根付いていくのか。教職員の視点になりますが、これは非常に重要な問題であると思います。

実際に、学生から運営の中での難しさを語ってもらいましたが、支援する側・支援される側、それからコミュニティ内の問題として困難が生じて、それでも今ピアをやっているという話があれば、もう少し聞かせてほしいと思います。

フロア（関西）・上野 ピア・コミュニティ運営本部の上野俊行です。よろしくお願いします。まず「支援する側・支援される側の境界線の問題」に関してですが、関大のピア本部はワークショップも企画しています。そのワークショップの中で、時に参加者数がどうしても少なく、規定しているワークショップを行うために企画側が参加者側に回る場合があります。そうした場合には、例えばファシリテーション能力を高めるためにやっている、コミュニケーション能力を高めるためにやっている、そのワークショップの意図を理解した上で進めることができますが、逆にそれはワークショップとしての自由度というか、一般参加者の意見などを潰してしまうのではないかなという不安があります。

また、人数が十分で、一般参加者のみでワークショップを行った時に、自分達が考えていた道筋とは全く違う方向に展開してしまったりして、うろたえると言いますか、それが結局ワークショップとして良かったのかと悩むことはあります。今でもワークショップを行っていく上で何を目標にするか考えてはいますが、参加者数もわからないですし、来てくれた人がどんな意見を出してくれるのかわからない関係上、まだまだ迷走しているように思います。そういう点で、解決策はありませんが「支援する側・される側の難しさ」を抱えていると思います。

司会・大島 「苦労しています。でも、解決策はまだありません」一すごく切実な話ですが、法政大学の学生はいかがですか。

法政・木原 私の意見も言いますと、企画やイベントをやって、そこにたくさん学生が集まったら、その学生をサポートしたんだっていう認識や傾向が強くなっていくことは間違いだと思います。たくさん人を集めるために、たくさんお金をはたいて有名人を呼ぶというところに行き着きます。これは間違いです。

KYOPRO がその辺りで苦労して、どうやってクオリティを上げるか、例えば「連続講座」の案など、色々な

第3章 学生支援GPシンポジウム実施報告

アイデアを出してくれます。KYOPROのリーダーである平塚さん、本人は意識がなかったようですが、毎月「PSC運営委員会」を教職員と学生スタッフで開催しており、その中で、1回限りの打ち上げ花火じゃない形につながっていくようなことをやりたい、と色々と考えてくれています。ただ、そのつながったもの、特定の学生を中心につながったものを行った場合、先程も話に出ました「開かれた企画」ではなくて「閉じた企画」へと向かってしまいます。例えば、特定の学生20人に対してのみ10回実施するというのは、果たしてサポートの形としていいのかどうか、そういった議論を繰り返しているのが我々の現状です。

司会・大島 笑ってはいけないのですが、実際に「ピア・サポート」を実施し始めているところっていうのは、まだ「これがいい」という基準の路線、平均的な路線を持っていないのが現状だと思います。まして、学生達がコミュニティを形成して、法政大学のプレゼンテーションの言葉を借りれば、「プロ」である教職員ではなく、自分達がそれをやっ払いこうと動き出した時に、難しい問題が彼らの前に立ちはだかってくるのは目に見えていることだと思います。実際にやってみて「すごい大変やったわー」と言っている子もよく見ます。ただ、私も学生達の様子を見てみると、1年生が、例えば体育会とか文化会とか学術研究会という課外活動に入って、そういう大きな壁にぶつかった時に何を選択するかっていうと、確かに信頼できる先輩が既にいた場合はその先輩に相談して解決する方法を探ると思うのですが、ピアの学生達は1年生から4年生までみんなが「よーいドン」で始めているんですね。そんな中で「じゃあ、もうみんなでやめよっか」という話にならなかったということを行っているというのが、今までのコミュニティ、既存の活動のコミュニティとは違うところなのかなと、学生達の話聞いていて思います。関西大学の中村さん、運営本部での苦労話などあれば話してみてください。非常にネガティブな話でも構いません。

フロア（関西）・中村 活動している上での苦労話ですか？ 私の場合は、みんな何かしら活動したい、大学を盛り上げたいといった想いを持った人達が集まっているので、意思の共有やモチベーションはとても良い状態で、活動しやすいと思っています。ただ、企画を運営する点で言うと、どういった企画をしたら学生をもっと惹きつけられるのだろうとか、どういった広報をしたら学生が来るのだろうとか、そういったところで、案や実行力、「いいやん、やってみようやん」といったチャレンジ精神を持ってやってみるといったことがもっとあったらいいのかなと個人的には思っています。

司会・大島 はい、ありがとうございます。いつものピア・コミュニティスペースでの愚痴話ほどは出ないですね。こういう場ですからそれは仕方ないとして、彼女が言っていた話ですが、どうすれば色々な学生に興味を持ってもらえるか、学生達に必要なサポートができるかという問題に直面するっていうのは、実は私達教職員はいつも直面していることではないかと思えます。それを今学生達は、ピア・サポートを始めたところで自分達の実感している、そういう状態でもあるのかなと感じたところです。

フロアの方々からの質問票で、もう少し学生の話を知りたい、どんな運営をやっているのか具体的に聞きたいという意見が多いということで、少し話を展開させて頂きまして、それではそういった難しさのある中で、大学にとってこの「ピア」というのは一体どういう意味を持つのか、これは法政大学も関西大学も「学生支援GP」でのテーマを「ピア」で出したということは、結局21世紀に求められる学生支援の在り方として有効ではないかと判断したからだと思います。田中さん、いかがですか。

関西・田中 大学にとって「ピア」の活動がどういう意味を成すかということだと思いますが、従来は学生が充実した学生生活を送るためには教員がいて、事務職がいて、いわゆる「教職員がサポートする」という形であったわけです。しかし、今は非常に多様な学生が大学に来ます。これは入試制度でも、むしろそういう「多様性」

第3章 学生支援GPシンポジウム実施報告

を歓迎しているわけですので、極めて多種多様な学生がいます。そういう中で、学生達が自発的に、何らかの自分達が抱えた問題を自分達自身で解決できるような仕掛けを作っていく必要があります。学生自身が持っている、お互いを助け合うような力を活用して、まさに「ピア」ですね、仲間が仲間を支援する。しかもこれは事務の方、或いは教員が学生に対して手を差し伸べて支援してあげる、そういう発想ではなくて、正に自然体で先輩が活動している、その先輩を見て「僕もああなりたい」「私もああなりたい」という形で学生が育っていく。そういう部分ですね。このピアの活動を、できるだけ上級生が下級生に対して自然体で接することができるような、しかもそれを観察できるような空間を大学としてきちんと確保する。そういう形でのサポートというのは、これからすごく大事だと思います。だから僕は、キーワードとしては「自然体」、自然体という形でそういうサポートが生まれてくる、そういう部分を強調しておこうと思います。

司会・大島 ありがとうございます。木原さん、いかがですか。

法政・木原 今の田中先生の発言は、すごく「理想の姿」を目指しているのはわかりますが、では放っておけば自然にそういうことができるかっていうと、まずできないわけです。今の段階で、この「学生支援 GP」が採択されて大学が得たものの1つは「お金」です。これを動かすのに必要なお金というものがある程度ありますので、そのことによって色々な企画を作ることできますし、例えば遠方でのボランティアもそのお金から少し補助を出すことによって敷居を下げるができる。将来的には、ボランティアには実費負担で行ってもらいたいと思っていますが、今のところは敷居を少し下げることができます。そういったお金のメリットがあります。

もう1つ、今回大学が得たものは、それをやるのが職務、仕事として大学の教職員に認められたということ。例えば学生部、学生センターは、サークルなどをサポートするというのが当然職務であったわけですが、それ以外のこのような学生が学生をサポートするという一種のボランティア的な動きを職務としてサポートすることはなかったわけです。もちろん、私立大学というものは特に教職員の中に OB・OG が多くて、自分の後輩のために自分の時間を割いてやろうという人はそれなりにいました。それで、このような取り組みをやること自体が仕事として認められるようになって、より深い付き合いができるということが、この学生支援 GP のメリットだと思います。だから、例えば土屋さんも熱心に、元々そういうことをやるのが好きな人なんですけど、より仕事として打ち込むことができる状態が、GP がある限りは発生しています。それが、将来的に本務としてつながるのかということ、まだはっきりとは言えないのですが、今のところそういった本務ができた。これは大学内のリソースを有効活用するという意味で、学生の皆さんにとっても大変ラッキーだったことで、この何か訳の分からないことを言っている教授ばかりがいるわけではなく、身近に相談に乗ってくれる先輩の職員がいる、そういう人達とコミュニケーションできるというシステムができた点では、良かったのだと思います。

司会・大島 ありがとうございます。今、木原さんから、やはり外部資金による取り組みであって、これまでの教職員の本務ではなかったことが今後どうなるのかという点についてのご指摘がありましたけれども、関西大学・学生センター所長の笹倉さん、この点についてはいかがでしょうか。

総合司会・笹倉 1つ心配をしておると言いますか、思うところは何かと言いますと、やはり文科省からの GP が切れた後ですね。その後どういう形でこの GP を継続、同じことをやっていけるのか、そういったところが1つの問題になるのではないかと考えています。実は、私はこの GP が採択されてからの着任でございますので、その辺りのところは私自身十分に考えているわけではございませんけれども、十分に考えながら、1つの教育の原点との兼ね合いと言いますか、学生に達成感を味わせてやりたい、もしくは学生に成功体験と言うのでしょうか、先程話が出てきましたように「ありがとう」と言ってくれた、そういったところで非常に気持ちが変わった、

第3章 学生支援GPシンポジウム実施報告

そういう体験というのは、今まで出て来なかった学生をそういったところに引き込むことができる。これは非常に大きな教育効果だと思っています。これを後々どうするのか、ちょっと考えなければならないと思っています。

司会・大島 ありがとうございます。単なる学生の活動拠点としてだけではなくて、大学としてはやはりここに大きな教育の原点とも言える効果を見るべきではないかというご意見であったと思います。

先程第1部でお話頂きました五藤さん、関西大学では学生サービス事務局長という役割をされておられます。事務職員の側から21世紀の学生支援、学生サービスというものをどのようにお考えでしょうか。

フロア（関西）・五藤 今色々とお話をお伺いして、やはり学生が多様化してきているということで、今回のこのピア活動も、これからの学生支援をどうしていくかという中の一環として活用されたと考えております。先程法政大学にはいきなり失礼なお話をしたのですが、私どもの方では、既に30年ほど前から学生運動の名残というのが出て、今もうそれが無くなっているわけです。そしたら、学内のキャンパスのムードが少し柔らかくなってきた。すると、学生自身があまり自己主張をしない、大学に対して様々な要求を突きつけるということもなくなってきた。その中で彼らが何も考えていないのかというと、そんなことは決してない。色々な思いを持っている。ただ、その出し方がわからない、そういうことがかなりあると思います。その部分を引き出していくのが、ある意味では我々大学の、学生部の職員の仕事かと思えます。その意味では、今日もいくつかお話に出ている中で、教職員、とりわけ日常的に窓口で接する事務職員の資質の向上というのはすごく大事だと思います。それは何かと言いますと、これまで私達が若い時は「先輩から盗め」「経験を積んだら何でもできるんや」と、そんな話やったんですけど、今はそういう状況ではなくなっていると思います。傾聴を基本としたコミュニケーション能力を持っているとか、学生の意欲や熱意を引き出すようなファシリテーション能力とか、そういうことが基本的に窓口でできる職員が育っていかなければならない。もう1つ言いますと、学生を対応する中で結論を出す時に、その対応が業務専門性を裏付けとしてちゃんと持っているか、大学の教育方針にちゃんと適っているのかどうか、或いはもっと言いますと、社会のニーズに適った形で対応できているのかということ、職員自らがチェックしていく、できる力を持っていくということも必要なのです。そういう意味では、今本当に学生支援のあり方というのが色々な形で模索されている。今回のこういう形でのディスカッションのようなことを回数を重ねて精度を高めていく。それに非常に意味があるのではないかと考えております。

司会・大島 「ピア・サポート」というこのキーワード。関西大学ではGPに採択されるまで、おそらく学生達の間で知っている子というのは、ほんの少数だったと思います。教職員の中でも、非常に少なかったと思います。これを取り組みとして申請書を作り上げていく中で、私達も色々教えて頂いた大学の先例があったわけですが、フロアの方でいかがでしょうか。

…今、木原さんの方から、明治大学の二宮さんに聞いてくださいという指示がありましたので、二宮さんいかがでしょうか。

フロア これからの学生支援という、ちょっと大きいフリということでもよろしいでしょうか。私は明治大学の学生支援事務室で現場の職員として、おそらく関西大学の早川さん、法政大学の土屋さんの立場で仕事をしております。実は両氏とはこの間も何度か情報交換し、大変勉強させて頂いております。やはり私達も取り組んでいて、今日出ている内容はほぼ全て共有しているというのが実感でございます。学生達が何をやっていいのか、そこをどれだけ明確にできるかというのが、今私が抱えている悩みの1つであります。そういったところも、先程の学生達の声の中で相当意見として出ていたかと思えます。

これからの学生支援ということですが、本当にこういう新しい形をどう展開できるのか、特に関わり方

第3章 学生支援GPシンポジウム実施報告

が変わってきていると思います。教員と学生、職員と学生、それからこういうことを一緒に取り組むと、教員と職員の関係も私は変わってきているように思います。そこで、それをどういうふうに構築していくか、これからももがきながらやっていきたいと思います。またこれからもご指導よろしく願います。

司会・大島 ありがとうございます。フロアの方からいかがでしょうか。

フロア 大分にございます立命館アジア太平洋大学のカワギシと申します。私どもはちゃんとしたHPができていないのですが、同じように19年で学生支援GPに採択されています。ただちょっと視点が違っておりまして、私ども立命館大学と違って、立命館アジア太平洋大学というのは留学生が約半数いるという特徴と、日英両言語教育という特徴があります。また、地域に還元する「地域貢献活動」ですから、みなさん学生がつくられているプロジェクトがほぼ地域に貢献するという活動で、学生がそれを立案し、一般の学生が参加するというようなことをしているわけです。そこで、同じように学生スタッフが私どもにもおりまして、そこで感じていることは、やはり「社会人基礎力の育成」というのは同じ視点です。経産省、もしくは経団連の言う社会人基礎力は欲しいというようなところはあると思います。そこで、より効果的に身に付けてもらうということで、私どもではスタッフのみなさんに当初に目標を立ててもらっています。この活動、学生スタッフの活動を通じて、あなたはどの成長したいのですかといったものです。途中で中間の振り返りと最終的な振り返りということで、面談を最初と中間と最後の計3回行って、みなさんがどれくらい到達したのかということをやっています。そこはマンパワーの関係もあり、人数的には限りがあるのですが、やはりそのスキルを活かす、伸ばしてもらうというところで、学生をいかにより効果的に支援するかということは今から考えていけないといけないと思います。

企業では一般的に人事考課などでMBO (management by objectives) を導入しているので、実際に企業でされているような人事考課、もしくは人事育成の手法を学生に対して行って、4年間でより付加価値を付けて卒業していってもらおうという手助けを広くやっていけないのかなと思っています。

司会・大島 ありがとうございます。平成19年度に、この「学生支援GP」の応募がかかった時、さて何をキーワードにして応募するのかということ、それぞれの大学が抱える問題を踏まえてお考えになったと思います。本日ここに来てくださっている方々の中にも、現在この学生支援GPを運営されている方々がたくさんいらっしゃると思います。実際のところ、そういった方々お一人お一人に苦労話なり、この外部資金で得られた制度から今後何を求めていきたいのかを伺っていきたいのですけれども、少し時間がおしてまいりました。そういったところは、この連続シンポジウムは「連続」と付いておりますので、来年は法政大学に舞台を移しまして、1年後更にこの活動が進んだところで、もう1度話し合せて頂きたいと思います。平成19年に採択が決まった大学においては最終年度ということになります。

最後に法政大学・関西大学、東と西の学生数の多い私立大学として、学生達を支援していく側に立つ教職員の抱える課題であるとか、こんなことをしたいということについて土屋さんと早川さんに話してほしいと思います。若い2人にこのような質問をするのはすごく意地悪かもしれませんが、よろしく願います。

関西・早川 この試みというのが新たな試み、教育効果が表れる新たな試みだと考えております。課外活動もすごく重要です。従来の体育会・文化会の活動も重要だと思います。その中で、多様な学生が入学してきた。そういう全入の時代になってきたということで、やはりチャンネルを多様化する必要がある。だから、学内を整備する必要がある。教育リソースをもうちょっと増やさないといけないということを私どもも考えております。文化会、通常の上下関係のある課外活動団体に属さない、そういう横のつながりの課外活動をいかに維持、継続していくかというのが教職員の抱えている課題でございます。

第3章 学生支援GPシンポジウム実施報告

先程言いましたように来年度で補助金が終わります。その後この活動をどう続けていくかというのが、1つの大きな課題だと思います。それと同時に、教職員が異動する可能性もあります。学生と事務職員の距離がすごく近くて、従来の学生と教職員の距離よりも近いんですね。「近くて緩い」という関係性がございますので、その分、私や今対応して頂いている教員の方々、事務職員の方々に起因するところだと思います。また、異動と共に事務職員のSDですね、Staff Developmentをもうちょっとやっていかないといけないのかなと私自身若干懸念しているところでもあります。

法政・土屋 私見ですが、課題は大きく分けると2つあると思います。1つは学生支援の在り方についてです。「学生支援 GP」は学生センターが主幹で採択されたものの、学内教職員にコンセプトの共有がなされていないと思います。法政大学でもいくつかの部局で様々なGPに採択されていますが、結局「あれはあの部局のこと」となってしまうのが現状です。GPというのは本来各大学の先進的・特徴的な取り組みとして採択されているわけですので、「大学のウリ」としての取り組みにどこの部局でも関わって良いものだと思います。例えば、ピア・サポートであれば「学生が学生を支援する」「支援を受けた学生が今度は支援する側に転化する」。非常にわかりやすい当り前の概念ですので、特段難しいことでもなくどの部局でも考えられることだと思います。そういった意味で、将来的には「これは学生センターの業務」という固定観念を取っ払って、大学構成員が「GP」を意識することが重要だと思います。

それともう1つ、先程早川さんの発言にもSDの話が出ていましたが、当然職員のスキルアップが重要です。教員と関わる、学生と関わる上で職員のスキルアップは必須です。例えば早川さんが異動したからダメになった、土屋が異動したからダメになった、このように取り組みが人によって左右されるのではなくて、それぞれの職員がスキルアップする。現状、教員の木原先生とも学生のみなさんとも本当に良い関係です。教員とのやり取りも非常にフラットですし、学生とも当然フラットということでもうまくいっていますが、これも人が変わって失敗したということにならないように、人で仕事が回るのではない体制づくりをしていくことが最終年度に向けた課題であり、今後の期待ということで私は考えています。

司会・大島 ありがとうございます。お若い2人がそれぞれの大学の特徴の中で模索している問題というのは、どうやら同じところを見つめているようですね。では、最後にもう1回、このピア・サポート活動における主役である学生達に問いかけます。みんな大変だと思います。今は確かに、大学としては外部資金をもらって「これをやりましょう」「みんなのエネルギーをぶつけてごらん」とか言っているわけですが、こういった状況が無くなった時に、つまり外部資金が無くなった時に、或いは積極的な教職員のサポートが今よりも無くなったとしたら、それでもこの活動を続けたいという人、手を挙げてごらん。はい、ありがとうございます。これが私達の側がみんなからもらうエネルギーになると思います。後ろを見てくださった方々もいらっしゃると思いますけれども、今ここに集まってきている学生達の多くが挙手してくれました。これが何よりもこの活動を実施している私どもの現状であり、小さな声で申しますけれども成果であると考えております。第2部をこれで終了させて頂きます。どうもありがとうございました。

法政・木原 パネラーのみなさま、大島先生、どうもありがとうございました。このシンポジウムもいよいよ終盤、ゴール目前となりました。先程大島先生が、残された課題があると申し上げておりましたけれども、延長戦は来年の法政大学ということで、法政大学学生センター長の宮崎先生に閉会のご挨拶をお願いしたいと思います。それでは宮崎先生、お願い致します。

法政・宮崎 法政大学学生センター長を拝命しております、宮崎でございます。本日は長時間にわたるシンポジ

第3章 学生支援GPシンポジウム実施報告

ウムにご出席頂きまして、どうもありがとうございました。これまで私もいくつものシンポジウムに参加する機会がございましたけれども、シンポジウムの成否を決めるのは7割はフロアのみなさま、3割は来席されたみなさまというふうには思っております。本日もこれだけ多くの方々において頂きまして、また遠路はるばるおいで頂いた方も多いと聞いております。また、休み時間にご質問等頂きましたものをもとに、大変中身の濃いシンポジウムを無事に終えることができたと思っております。私自身、非常に楽しく今日のシンポジウムに参加しておりましたけれども、「ピア・サポート」のポイントは色々ありますが、人と価値観の共有といったような点にまとめられるような気が致しました。関西大学の学生の方も、法政大学の学生も、共に自分達が参加して良かったということを報告しておりましたし、一方で人の集まりにもなかなか苦労しているという点も共通していたと思います。しかし、たとえ外部資金がなくなっても続けますか？という問いに対してみんな手を挙げたように、みなさんのこれまでの活動を見ていますと、非常ににこやかに楽しく取り組んでいることがよくわかりました。GPというのは good practice、模範的な、実践向けということでしょうけれども、どうも私にはこれが「ご機嫌なプログラム」に思えてならないんですね。実際に参加しているみなさんが、非常にご機嫌なプログラムを重ねていくことが益々参加者を増やしていく、人の問題を解決することにつながっていくのではないかという気が致しました。

活動の場についてですが、これは物理的な空間的な場が必要だというご意見もありましたけれども、それ以上にやはりみんなが気持ちの上でつながっていくことの大切さが、随分今日は強調されたように思います。これは物理的な空間だけではなく、これだけ ICT 技術が発達しておりますし、気持ちでつながるということ、それから情報でつながるということも非常に大事ですし、色々なつながり方、場の設定がこれからも発足していくかと思っております。

それから価値観の共有ですね。これは最後の方で出てまいりましたけれども、大学の1つの部署が担当しているだけではなく、大学全体としてこの価値観を共有していくことも大事だと思います。それぞれの企画そのものは仲間をどんどん増やしていく形でもって、例えば野球を観戦しに行く、或いはサッカーを観戦しに行くという行為は同じだとしても、ここにどういう意味があるのか、どういう価値があるのかということをごんごん広げていくことが非常に重要だと思えました。

先程もお話ございましたように、今回のシンポジウムは「第1回学生支援 GP 連続シンポジウム」となっております。2回目がないと連続になりませんので、来年度、今度は法政大学で第2回を開催したいと思っております。日程等は未定でございますが、またご案内をさせていただきますので、みなさまぜひご参集頂きたいと思えます。それから本当の結びになってしまいましたが、先程のシンポジウムも、まさに学生と職員と教員が一体となって一緒に作ってきたシンポジウムだと思います。これだけの大きなイベントを開催して、私どもをお招き頂きました関西大学の皆様方に心から感謝、御礼を申し上げたいと思えます。ご参集頂きましたみなさま、本当にありがとうございました。また来年、お会いしたいと思います。これで私の結びのご挨拶とさせていただきます。ありがとうございました。

法政・木原 宮崎先生、どうもありがとうございました。一部の事例報告、それから二部のパネルディスカッションに参加して頂いた方々、またこの会場にお集り頂きました方々に改めて御礼を申し上げたいと思えます。先程の事例報告、それからパネルディスカッションに参加して頂いた方々に、もう一度拍手をして頂ければ幸いです。どうもありがとうございます。本日予定しておりましたプログラムは、これで全て終了致しました。進行にご協力頂きまして、誠にありがとうございました。本日はありがとうございました。